

キャラのないしょ



PARALLEL ACT

キャラのないしょ

目次

第1章	5
第2章	7
第3章	13
あとがき	20

キャラとエリオ仲直り。

あらすじ

注意!! これは頒布促進用のあらすじです。当然ネタバレですので、本編をじっくりと読みたい方は、このページを読まないでください。

なお、微妙に本編と違う所がありますが、ご了承ください。

1

いつもの訓練が終わった後、キャラはエリオと一緒にシャワーを浴びようとしますが断られる。

2

キャラが初潮になる。スバルとティアの横やりでエリオがキャラに嫌われる。

第1章

1

「はい、今日の訓練は終了了」

「ありがとうございます！」

なのはの軽快な声で、本日の訓練は終わる。それに反して、ティア・スバル・エリオ・キャラの四人はがっくりと膝を付き、肩で息をする。

「ふい〜 終わった〜」

「今日も疲れた〜」

「さあ、シャワー浴びよう」

四人は足を引きずり、お互い支えながらシャワールームに向かう。

(よし、今日こそは！)

キャラが両拳を握りしめて気合いを入れる。

「ねえ、エリオ君。一緒にシャワー浴びよう」

「うええっ!？」

男女別れるシャワールームの前で、キャラがエリオの腕を引く張る。そして、エリオは素っ頓狂な声を上げた。

「だっ！ 駄目だよ！ 男女一緒にシャワーなんて!」

「地球では十歳まで一緒にお風呂入っても良かったじゃない」

「ここは地球じゃないし、それに、ティアナさんやスバルさんもいるし」

エリオはティアアやスバルを出汁だしに使ったが、

「あれ、あたし達は構わないよ」

「そうそう、女風呂に堂々と入れるなんて子供のうちだけなんだから。今の内にいい思いしておいた方が良くわよ」

と、あっさりとかわされる。むしろ状況は悪化した。

「エリオだって本当は裸見たい癖にい」

「そ、そんな事思つてません!」

「またまたあ。正直に白状しなさい。あたし達のナイスバディ見たくないの?」

「そんなもの見たくありませんっ!!」

「……………」

暫く沈黙が続いた。

「へえ………… いい度胸してるじゃない…………」

第2章

1

「ふああ……」

機動六課の朝は早い。まだ外が薄暗い中、起床しなければならぬ。キャロはゆっくりと起き、身体を伸ばすと、眠い目を擦りながら洗面所に向かう。

用を足して、歯を磨いて部屋に戻ってくる頃には大分意識がはつきりしてきた。練習着に着替えるために、パジャマを脱ぎ、続いてパンツも下ろす。そのパンツを見て異変に気づいた。そして自分の股間を覗き込んだ。内股にすくと、赤い線が延びる。

「な、何これ〜っ!」

キャロは涙目になって、思わず叫んだ。

バル、エリオの三人が集合している。

「エリオ? キャロは? あの娘が時間に遅れるなんて珍しいわね」

「僕は何も聞いてないですけど、何かあったんでしょうか?」

そこに、なのはが現れる。

「はい、おはよう。皆いるね」

「なのはさん、キャロが来てません」

「ああ、キャロなら、シャマルさんから連絡があつて、今日はお休みです」

「シャマル先生から? どこか悪いんですか?」

「ん〜 悪いって言うか…… ちょっとこれから大変かなあつて言うか……」

と、なのははエリオ相手に返答に困る。

「これからって、そんな……! 治らないって事ですか……?」

「いやいや、そうじゃないよ、全然心配しなくて良いから」

「え、でも……」

「そうよ、心配しなくて良いって言うてんだから、あんたは今日の訓練をちゃんとしなさい」

「そうそう。後でお祝… じゃなかった。お見舞いに行こうか」

同性だけにティアとスバルは、キャロに何が起こったか気づいた。しかし、エリオには伝えられない。

その日のスバルの訓練は、キャロを心配するあまりボロボロだった。

「ちょっと、スバル！ 何やってんの!? キャロが心配なのは分かるけど、目の前の敵に集中しないとやられるよ！」

「すみませんっ!!」

戦闘時に仲間が傷つくのはあり得る事、心配するのは当然だが、必要以上に気を取られていると、自分はもちろん他の仲間も危険に曝さらしてしまふ。キャロを気にして、ティアやスバルまで負傷させては元も子もない。

2

「う、ひつく…… 本当に病気じゃないんですか？」

「そうよ、むしろ健康な証拠なんですよ」

「おしつこの代わりに血が出て、お腹も痛いのに？」

「え〜と、じゃあ、ちゃんと順番に説明するわね」

医務室で、ベソをかきキャロをシャマルが必死になだめていた。診察するまでもなく、キャロの出血の原因は明白。なのは簡単に状況を連絡した後、キャロへのケアに努める。

シャマルは、女の子の身体の構造、生理という現象について一通り説明する。

「だから、これはキャロが大人になったって証拠なの」
「本当に？」

「そ。喜んで良いことなのよ」

「そうなんですか？」

キャロはまだ信じられない。

「ええ。はやてちゃんが初潮になった時もお祝いしたし」

「お祝い？」

「はやてちゃんの住んでた世界では、初潮になったら『お赤飯』と言つのを作ってお祝いする風習があったの」

「シャマル先生もお祝いしたんですか？」

「わ、私が住んでた所はそんな風習無かったから」

シャマルはそう言うことにして誤魔化す。プログラムであるシャマルには生理がない（もちろん他の守護騎士も）。しかし、プログラムである事自体が機密事項、皆と同じく生理があると言うことにしておく。

3

キャロはナプキンの使い方を教わって、自室に戻る。腹痛も強くなって来たので、ベッドで横になった。

（今日から大人の女性かあ）

そう言われても全く実感が湧かない。昨日の自分と今日

の自分、何が変わったかと言えば「膣」と言う所から血が出ただけだ。背が伸びたわけでも、胸が大きくなったわけでも、毛が生えたわけでもない。昆虫だったら脱皮して見た目が全然変わるの、一目で分かる。

(そう言えば、もう赤ちゃんを作る準備が整ったんだって言うって)

キャロは人間の赤ちゃんを見たことがほとんど無かった。少数部族だったたので出産の数は少なかつたし、直ぐに部族を離れ、放浪の旅に出たのでずっと一人だった。管理局に入ったら尚更赤ちゃんを見る機会なんて無い。写真やビデオ、動物の赤ちゃんぐらいいしか見たこと無い。

それでも、その赤ちゃんが自分のお腹の中で育つ事を考えると、不思議な気分になった。自分の母の記憶は曖昧だが、それでも母の偉大さは知っている。その母に自分が成る準備が整ったなんて信じられなかった。

キャロは自分のゆつくりとお腹をさす。この小さなお腹の中に、赤ちゃんが育つなんて信じられなかった。

(赤ちゃん……私がお母さんになるなら、お父さんは……)
その時、エリオの顔が浮かんできて、キャロは赤面する。
(エ、エリオ君!? どうして!?)

キャロはなぜここでエリオの顔が浮かんで来たのか分からなかった。さらに、シャマルが言っていた「子供を作る

行為」が浮かんでくる。

(エリオ君のペニスを私の膣に入れて射精……)

キャロは布団を頭から被って、さらに赤面する。いや、赤面どころか身体中が真っ赤になる。

(ペニスって、おちんちんだよね。おちんちんを膣に入れるって、パンツ穿いてたら出来ないよね。じゃあ、パンツ脱いで……)

その様子を想像すればする程、恥ずかしい光景が浮かんでくる。

(裸になって……裸……?)

エリオが裸になる光景、さらにエリオを受け入れるために自分が裸になる光景を思い浮かべた時、また別の「裸になる必要がある行為」を思い出した。

(私、今までエリオ君に『一緒にお風呂に入ろう』って言うてた!)

子供を作る行為と、入浴行為のイメージが直結する。

(私、とんでもない事言ってた……)

キャロは自分の軽率な言動を後悔し、今度は青ざめた。

「じゃあ、今日の訓練はこれで終わり。キャラが居ない時のフォーメーション訓練できて良かったね」

「はい！ ありがとうございます!!」

そう言つて、三人は倒れ込む。四人でも苦勞するなのはの相手を三人で行わなければならない。それにエリオはキャラが心配で動きが悪い。普段以上に過酷な訓練となった。「じゃあ、シャワー浴びたらお祝… お見舞い行こうか」「そうですよね…」

エリオは一目散にお見舞いに行きたいが、流石に自重した。お土産も持つて行った方が良かったろうし。

「エリオ、一緒に入る？」

「な！ 何を言ってるんですか!? こんな時に!」

エリオは早くキャラの元に行きたいのに、この二人はからかう余裕があるのか。キャラの事が心配でないんだらうか？

「女の子の身体の事は知っておいた方が良いわよ」

「シャワールームで勉強しなくてもいいです!」

「本だけじゃ身に付かないわよ。ちゃんと実体験しないと」

「何の体験ですか!？」

エリオはさっさと男子用シャワールームに逃げ込む。

シャワーを浴びた後、エリオは売店に行き、お見舞いの品を物色する。果物の辺りを見てみると、ティアとスバルがやってきた。

「果物かあ。栄養はあるけど、あんまりお腹冷やさない方が良いかもねえ」

「お腹？」

（なのはさんは詳しく言つてなかったけど、二人は病気が何か知ってるのか？）

「え、あたしはアイスとか普通に食べてるけどなあ」

「あんたは造りが違うでしょ」

「うわっ！ ひっどい!」

そんなわけで、無難にお菓子を買っていく事にした。

「キャラ、お見舞いに来たよ」

「エリオ君、皆……」

部屋のドアを開けると、キャラがベッドから顔を出した。

「顔青いけど、大丈夫？」

「ありがと。全然大丈夫だよ。ちょっとお腹が痛いだけだから」

「お腹？ 熱とかはない？」

「平気だよ。測ったら平熱だし」

「それなら良いけど……」

キャロの顔は、過去の軽率な言動による自責の念で青い。

それをエリオは具合が悪いからだど勘違いしたようだ。

「キャロおめでとつ」

「え？ あ、ありがとつ」

「これからが大変よ。毎月毎月面倒くさいんだから」

「そうそう、ティアなんか機嫌悪くなって大変なんだから」

「あんたは良いわねえ、楽で……」

スバルとティアが耳打ちする。あまり男子に聞かせる話

ではないからだ。

「何話してるの？」

「何でもない、何でもない。女同士の話」

「……？」

エリオが首を傾げる。

「あ、これ、お見舞いだから。お菓子。机の上に置いてくね」

「え？ あ、うん、ありがとつ」

エリオは売店で買ってきたお菓子を机の上に置く。その

時に机の上に無造作に置かれていた生理用品に気づく。

「あれ？ これって……」

「あつ！ 駄目っ!!」

シヤマルから貰って、そのままにしておいた生理用品を見られ、キャロは慌てふためく。ティアとスバルも必死に言い訳を考える。

「あ、そっか。キャロ、おめでとつ」

エリオはそれが何であるか気づくと、爽やかな笑みで祝辞を述べる。しかし、やはり気恥きぢずかしさがあるのか、少し引き攣り、顔も段々と赤くなる。

エリオの赤くなった顔を見ていると、キャロの方の羞恥心も増していく。それに、自分の女としての身体の変化を、男の子に知られるなんて恥かずかしい。また顔が赤くなり、口がわなわなと震える。

「あ、エリオ赤くなった」

「まさかキャロでHな事想像してんじゃないでしょうねえ」

「そんな事するわけ無いじゃないですか!」

スバルやティアの言葉で、キャロの頭の中にさっきまで妄想していたイメージが再び現れた。さらにエリオも自分と同じように、「子供を作る行為」を想像。しかも相手は自分。したのだと勝手に結論が向かう。エリオの否定は聞こえない。

「嫌いやっ！ エリオ君のHっ！ エリオ君なんか嫌きらいっ!!」

キヤロは枕を手始めに、辺りの物をエリオに投げつける。

「まあ、まあ、キヤロ落ち着いて……」

「そうそう、さっきのは冗談よ、冗……」

「皆嫌いっ！ 皆出てっ!!」

止めに入ったスバルやティアにも物をぶつける。もはや手が付けられない。三人は仕方なく部屋を出て行った。

「キャラ、入るよ」

第3章

1

（嫌い！ 嫌い！ 嫌い！ エリオ君なんか嫌い！ エリオ君がこんなにHだったなんて……）

キャラは自分の事は棚に上げてエリオを嫌う。変な妄想をしていなかったのに、していたと勘違いされて嫌われる、エリオにとっては不幸でしかない。

（やっぱり、男の子ってHなんだ…… 漫画とかで事、本当なんだ）

エリオはすっかり悪者にされてしまった。

（赤ちゃんを作れるって事は、Hな事出来るって事だよ）
別に初潮にならなくても性行為は出来る。しかし、キャラにはまだそこまでの知識は無かった。

キャラが落ち着いた頃を見計らい、ティアが部屋に入ってくる。キャラは布団の中で丸くなったまま、顔も上げない。「さつきはごめん。あたしがあんな事言っちゃったから」
「……」
「あはは、まだ怒ってるか……」
（さて、どうしたものか）
ティアがぼりぼりとこめかみを搔いていると、ようやくティアが口を開く。
「ティアナさん、男の子って皆H何ですか？」
「ああ、あれ、嘘。あたしが言った冗談だから真に受けないで」
「冗談？」
「そうそう。あの真面目で初^{つぶ}なエリオが、キャラで変な事考えるわけじゃないじゃない」
「そうなんですか？」
キャラの顔が少し明るくなる。
「そうそう。だから、世間一般的な位Hなだけよ」
「世間一般的？」
今度は訝^{いぶか}しげな表情になる。
ティアは少し「しまった」と思いながらも、エリオを完全な「潔癖性」にして、後になって事態が悪化させるよりは、「正しい認識」を持たせておいた方が良く考えた。

「そりゃ男の子だもん。Hな事くらい考えるわよ」

「じゃあティアさんは、エリオ君が自分でHな事考えてても良いんですか？」

「……か、可愛いじゃない」

ティアは少し引き攣りながら肯定した。

「じゃあ、ヴァイスさんでは良いんですか？」

「それは嫌」

今度は即答した。

「……やっぱり」

「いや、そう言う事じゃなくてね、エリオがHな本やビデオ見ても驚いちゃ駄目って事よ」

「はあ……」

今一説明し切れてない。ティアは禁断の技を出す。

「じゃあ、キャラはHな事考えた事無いの？」

「ええっ!? 何を言うんですか!？」

キャラの顔が途端に赤くなる。これは考えた事ある顔だ。

「考えた事あるわね。自分はHな事考えてるのに、エリオは考えちゃ駄目って不公平じゃない？」

「そっか、そうだよな」

「そうよ。それにHじゃない男の子なんて、鳴かない雄鶏おんどりと同じよ。存在意義なんて無いんだから」

「そ、それは……」

流石にそこまで来ると否定したくなる。

「じゃあ、ヴァイスさんがHでも……」

「構わないわ」

「ヴァイスさんがティアさんで……」

「クロスファイヤーぶち込む」

「……」

キャラは今一納得できないが、エリオと仲直りしようと思ったのは決めた。

2

空気が重い。その中心にエリオが居て、どんどんと重さを増している

「キャラに嫌われた……」

「まあ、そんなに落ち込まないで。エリオが悪い訳じゃないんだしさ」

トドメを刺したのはティアとスバルだが、エリオがキャラの初潮に気づいた時点で、最終的に追い出された可能性は高い。しかし、二人ともそこまでは考えが至らない。

「スバルさん、どうやって許してもらえenと思いますか？」

「え〜っと、まずは素直に謝ることかなあ……?」

「それで許してくれるでしょうか？」
「大丈夫だよお。あたしも一緒に謝るからさ」
とエリオに言ったものの、それは自戒も込めてのものだった。スバルはむしろ謝るのは自分だと思っていた。

3

スバルとエリオの二人がキャロの部屋を訪れる。ドアが開いた瞬間、「ごめん！」と同時に頭を下げた。

「あたし達が変わなこと言ったから、エリオと喧嘩して……エリオは悪くないから！ だから、エリオを許して！」

「キャロ、ごめん！ でもHな事なんて考えてないから！！ 本当に！」

突然の来訪と、あまりの迫力に、キャロとティアは何が起こったか直ぐには分からず、ぽかんと二人を眺めた。

「え、えくと、いいよ。もう気にしてないから…… 私も怒ったりして、ごめんなさい」

「ここまで真摯に謝られると、怒りも失せてくる。

「え、それじゃあ……」

「うん、仲直りしよ」

「キャロオ」

スバルとエリオの顔が明るくなった。

「そ、良かったわね。じゃあ、あたし達はまた改めて来るから」

「え？ あ、ちよつと」

「少しは気を遣いなさいよ」

そう言つて、ティアはスバルを部屋の外に引っ張つていった。後には、エリオとキャロだけが残った。

「えくと……」

少し苦笑と照れを浮かべながら、エリオはキャロのベッドの側まで行った。

「ご、ごめんね。エリオ君男の子だから、Hな事考えるの当然だつてティアさんに言われちゃった」

「ええっ!？」

ティアがキャロとの喧嘩の仲裁をするべく、頑張つてくれたのだとエリオは理解したが、替わりに別の誤解が植え付けられてしまったようだ。

「そ、そんな事無いよ！ キャロでHな事なんて考えた事無いよ!!」

「本当に？」

「うん、本当に!」

「そう、良かった」

(ほっ……)

キャロの顔が明るくなったのを見て、エリオは安心する。

「でも、Hな事は考えるんでしょ」

「ええっ!？」

キャラ口がエリオの目を真っ直ぐに見つめながら問うてきた。

一難去つてまた一難。エリオはどう答えようか悩む。冷や汗が滲む。考えると言えば嫌われそうだし、考えてないとすれば疑われそうだ。

「す、少しは……」

エリオは少し目を逸らしながら答える。

「あはっ！ やっぱいい」

キャラ口がからからと笑う。エリオの頬が赤くなる。

「ティアさんが言つてた。男の子がHな事考えるのは普通だつて。だから、エリオ君もHな事考えて良いよ」

「あ、はは……」

そう言われても、エリオは苦笑するしかない。

「それに私も…… やっぱなんでもない」

「え？ 何？」

キャラ口は何かを言いかけて止める。顔が赤い。

「とにかく！ 仲直りしよ」

「う、うん。そうだね」

エリオは何か腑に落ちないが、追求はしない事にした。

でないとまた喧嘩になりそうだ。

「じゃあ、改めて。おめでとう」

キャラ口の顔がまた赤くなる。

「あんまり言わないで。恥ずかしい……」

「でも、とっても大切な事で、恥ずかしい事じゃないつて……」

「エリオ君だつて顔赤いじゃない。説得力無いよ」

「そ、そうだね」

ちよつとばつが悪い。

「でも、キャラ口の方が一步先に大人になったんだね。僕、精通まだだし」

「そつかあ。エリオ君は精通まだなんだ。じゃあ、セックス出来ないね」

「ええっ!？」

エリオは予想外の言葉が出てきて驚く。

「セックスつて、精子を卵子に届けるんでしょ。じゃあ、精通してないと出来ないって事じゃない？」

「そ、そうなんだ……」

もちろん精通が無くともセックスは出来る。もちろん射精しないので妊娠する事はないが。

「だから、エリオ君が私とセックスする事想像したんだと思っただけど、違うんだよね。だってセックス出来ないんだし」

「ええっ!? そんな風に思ってたの!？」

エリオはキャロの予想外の考えに驚いた。

「だから、ごめんなさい。私が勝手にエリオ君の事誤解して…」

「う、ううん。いいよ、誤解が解けたんなら……」

何か釈然しゃくぜんとしないが、これ以上波風は立てないようにする。

「エリオ君も精通したら教えてね♡」

「ええっ!？」

「だって、エリオ君は私が初潮になった事知ってるんですよ。私がエリオ君が精通した事知らないと不公平だよ。今度は私がお祝いするから」

「あはは…… うん、分かったよ…… 教える……」

エリオ君は逆らわないようにする。キャロの言動に驚かされてばかりだ。まさか「実際に射精する所を見せて」とか「精子（精液）を見せて」と言い出すようになるとは夢にも思わなかった。

あとがき

皆さんごきげんよう。PARALLEL ACT 主催者 TomOne です。

今回はキャラの「ないしょのつぼみ」本です。なのはで初めての非18禁本です。微妙にエロいかもかもしれませんが、このくらいなら放送もできる範囲でしょう。いや、別にエロ展開にしても良かったんですけど、プロット考えてたらエロ無しな展開になり、納まり良かったのでそのままです。ただ、初潮本なので、エロ本以上に女性に見せられない本になっただかも(笑)

ただ、野郎が初潮の女の子の気持ちを考えるのは苦労しました。WWWで「初めて」の相談サイト探して、キャラだとどう考えるかシミュレートして…… 本当はもっと苦悩、自分の身体の変化への戸惑いを描きたかったんですが、自分の限界というか、途中で微妙に別の方向に向かっ

ちゃったし。

キャラの十歳で初潮はちょっと早いかと思っただんですが、まあ、許容範囲かなと。

大体アニメキャラの初潮って早い事多いですよ。「ジャングルロビーこう！」の六道那栞美が十歳。「天使のしっぽ」のモモが九歳。ドラマだけど「ER」のレイチェルが十歳。

逆に一番遅いのは榎木・砂沙美・樹雷の七百九歳でしょう。いや、コールドスリープ除くと九歳で最年少の部類になります。つか、こいつ地球人じゃねえし。いや、モモなんか人間ですらないけど。

普通に遅いのが「桃華月憚」の犬飼真琴が十六歳? 「スピードグラファー」の天王洲神楽が十五歳で初潮まだ。いや、こいつら色々普通じゃ無いですが。

だからキャラが十歳で初潮になっても全然早くないです。なりより、三次元でも十歳で初潮は有るらしいし。

今後、冬に引越しなければならなのでイベント参加は自重します。少しだけ買物には行きます。サンクリには委託で持って行きますけど。流石に日常生活は大事な

ので。オタクは荷物が多いので大変です。広い部屋は高いし、安い所は不便だし。

引っ越しますので、奥付の住所は当然変わります。一年くらいは転送されるでしょうけど。最も、郵便で感想来た事なんて無いですけどね。今かなりのサークルが奥付に住所書かない中、まだ古き良き時代の名残と責任として、まだ住所は書き続けるつもりです。

自分での参加はゴールデンウィークくらいからかなと思ってます。夏コミは申し込み早いですけど、参加申し込みくらいは出来るかなと。その前に住所決まっていなくて面倒臭いですが。

その時はまたよろしく願います。それでは。

'07年12月27日

TomOne

1975年6月28日、熊本生まれ。蟹座、O型。過去に『新世紀エヴァンゲリオン』『家なき子レミ』『救命戦士ナノセイバー』『学校の怪談』『天使のしっぽ』『電腦天使』『マリア様がみてる』『かしまし』の同人誌を発表する。

キャラのないしょ

PARALLEL ACT SERIES

2007年 12月31日 第1版発行

定価はカバーに表示してありません

著者 TomOne
発行者 村上智一
発行所 PARALLEL ACT

URI <http://p-act.sakura.ne.jp/>

E-Mail tomone@p-act.sakura.ne.jp

印刷機 あなたのプリンタ

Printed in Japan

造本には十分注意しておりますが、乱丁・落丁（本のページ順序の間違いや抜け落ち）の場合はお取り替えいたします。まずは、当サークルにご連絡ください。

送料は当サークル負担でお取り替え致します。但し、古書店で購入したもの、自ら印刷したものについてはお取り替え出来ません。

